

# まんたら通信

第158号 (通巻190号)

平成21年(2009)08月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org



## 終戦記念の日に

それまでの小学校が国民学校になって最初の一年生。戦後、学校制度が今のように六三制になって、最初の一年生が昭和九(1934)年生まれの私たち。今年の誕生日で75歳、つまり『後期高齢者』の仲間入りというわけです。

日本は幕末の開国から三十年足らず、日清戦争によってアジアの大国シナを倒し、同じく五十年たらずでヨーロッパの超大国ロシアに勝ちました。この時、列強による植民地支配に苦しんでいた国々は諸手を挙げて、日本のために喝采を送りました。

東京裁判でただ一人、堂々の正論を吐いて日本無罪の判決を下したインドのラダビノード・パール判事の回想によると「日本がロシアに勝ったあの時、我々インド人は一週間も毎日戦勝パレードをして、日本の勝利を祝った」そうですね。

実は日露戦争に勝ったこの時、欧米列強、特にアメリカは日本が力をつけることで、やがて自分たちの脅威になると、警戒を抱くようになったと言われています。

これが黄色人種は危険であるという『黄禍論』になり、アメリカでは日本からの移民を停止することにつながり、やがて『ABC包囲陣』という経済制裁で、日本の息の根を止めようとなりました。

大東亜戦争はこのような背景があつて起こったものですが、(序でに言うと、真珠湾奇襲攻撃はその前からアメリカのフランクリン・ルーズベルト大統領は、そのことを承知していたということですね)日本に進駐してきたマッカーサー將軍は、日本民族の底力を見抜いていましたから、日本が再び強くなるならいたための方策を考えました。

その象徴の一つが『東京裁判』で、『日本悪者』のレッテルを貼ることにした。敗戦から六十四年、ご本人のマッカーサーが帰国後の議会公聴会で「あの裁判は間違っていた」と証言したにも関わらず、未だに『日本は悪かつた』という考え方の日本人が多いとはご本人もビックリではないでしょうか。

その証拠に、終戦記念日の今月十五日を挟んだNHKの特集番組をご覧下さい。当然私はまだ見ていませんが「あんな戦争はご免だ」、「平和が一番だ」、「国に痛めつけられた」というような話ばかりです。

でも、本当にその通りでしょうか。「国を救うためなら死ぬこともいとわない」といつて散った特攻隊員は犬死にだったのでしょうか。

たとえばまた、沖縄の司令長官太田實海軍少将の「沖縄県民斯克戦ヘリ県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」の「決別の電報」など、どのように解釈すれば良いのでしょうか。

すべて、自分を捨てて国のために尽くす、という自己犠牲の心ですね。

近頃、特に弱くなったものがこの「みんなのために」の心ではないのでしょうか。

そこで、先輩の皆さんにお願いです。皆さんは、日本がまだ精神的に元気だった頃の教育を受けた世代です。

教育勅語を憶えている方もおいでしよう。「もう身体が利かなくなつて」と仰いますが、口が達者なうちは大丈夫です。指先が動くのならパソコンという文明の利器があります。

どうぞお孫さんやご近所の「悪ガキ」に、日本人の美德や歴史を話して下さい。向こう側に行つてから悔やんでも間に合いません。

『原色牧野植物大図鑑』には「本州の関東以西、四国、九州、琉球、済州島に分布し、海岸の砂地に生える常緑の多年草。」「北限は年平均気温15℃線と考えられる」ということなので、この白浜辺りが北限ということですね。

◆月遅れのお盆が来ます。この集落もご他間に漏れず、お年寄りの一人暮らしなど多いところですが、子や孫が一家でお墓参りに帰ってきて、この時ばかりは人口が急に3倍ぐらになります。いつもこんな風だと良いのですが。09.08.09 龍渉



◆8月7日は立秋でした。梅雨明け宣言後も一向に夏空になりませんでした。漸く昨日今日暑いと思う日でしたが。でも、季節は正直だと思えます。数日前から法師ゼミの声や、夜になるとウマオイムシが部屋に来て鳴き始めました。秋は間違いないように来ています。◆きのう、8月8日は恒例になった館山の花火大会。良く晴れて風のない、打ち上げにはこの上ない天気でした。不景気で取りやめるところが多いという話を聞きましたが、敢えて実行した館山の皆さんに喝采です。素晴らしい花火を楽

しませてもらいました。あの、お腹に響く音と、上に上がってからのほじける音。やっぱりその場に行くのが一番ですが、iPhone3Gsという携帯電話で撮った動画を『紫雲寺』のホームページの『ミツバチ日記』の『MOVIE』に保存しましたので、折りがありましたら見て下さい。携帯電話でもこの程度は出来るということと、雰囲気の一部程度はわかるかと思えます。◆ハマオモト(ハマユウ)【ひがんな科ハマオモト属】。もう何回目かの登場です。

## 余滴

## 慈悲の心 鉄眼（てつげん）

一切経は仏教に関する書籍を集めた叢書であつて、仏教を志す人にとつては、このうえなく貴重なものである。しかも、それは数千巻という大部なもので、これを出版するのは、容易なことではなかつた。したがつて、以前は支那（中国）から来たものが、ごくわずかあるだけでいくらはしくても、なかなか手に入れることができなかった。

今から二百数十年前、山城宇治の黄檗山万福寺に鉄眼（てつげん）という僧があつた。

あるとき鉄眼は自分の一生涯の仕事として、この一切経の出版を思ひつた。そうしてどんな困難をしのんでも、かならずこの企てを成しとげようと固く心に誓つた。

鉄眼は、広く各地をめぐり歩いて資金を募り、数年かかつて、ようやくその資金をととのえることができた。鉄眼がいよいよ出版に着手しようとしたときである。大阪地方に出水が起こつた。たくさんの死傷者ができ、家産を流失して路頭に迷う者は、教えきれないほどであつた。目のあたりに、このあわれなありさまを見て、鉄眼はじつとしていることができなかつた。

「自分が、一切経の出版を思ひつたのは、仏教を盛んにしようとしてのことである。仏教を盛んにしようとするのは、つまり人を救おうとするためである。喜捨を受けたこの金を、一切経のために資やすのも、飢えた人々の救済にもち

るのも、帰するところは同じである。一切経を世に広めるのはもちろん大切である。けれども、人の命を教うのは、もっと大切である」

こう思つた鉄眼は、喜捨してくれた人々の同意を得たうえで、出版の資金全部を救済の費用にあてたのであつた。

苦心に苦心を重ねて集めた出版費は、すつかりなくなつた。しかし、鉄眼は少しも氣にかけず、また募集に着手した。それからさらに数年、努力はむくわれて、いよいよ志を果たすことのできる日が近づいた。

ところで、今度は近畿地方一帯に大飢饉があつて、人々の苦しみは、この前の洪水どころではなかつた。幕府は、たくさんの救い小屋をつくつて、救済にあたつたが、人々の難儀は、日ましに募つていくばかりであつた。鉄眼は、ふたたび救済を決意した。こうして、鉄眼は二度資金を集めて、二度それを散じてしまつた。しかも、鉄眼は第三回の募集に着手した。彼の深い慈悲心と、あくまで一念をひるがえさない熱意とが、世間の人々の心を動かさずにはおかなかつた。

われもわれもと多くの人々が、進んで寄付に応じた。資金は、意外に早く集まり、製版・印刷のわざは、着々として進んだ。鉄眼が、この大事業を思ひつたついで、来十七年、天和元年（1861）に至つて、一切経六千九百五十六巻の大出版は、ついに完成された。これが世に鉄眼版と称されるもので、一切経が広く日本に行われるようになったのは、実にこれ以来のことである。

この版木は、今も万福寺に保存され、三棟の倉庫にぎっしりつまつてゐる。

「鉄眼は、一生に三度、一切経を出版した」これは、のちに福田行誠（ぎょうかい）という人が、鉄眼の事業を感歎していつたことばである。

〔資料 国民学校修身教科書初等科四〕

（黄檗版ともいわれますが、このお寺にも大般若経六百巻があります。これも教科書にある鉄眼禅師の一切経の一部です。）

今回取り上げたのは、小池松次さんが昔の修身教科書からよりすぐつて一冊に編集した『修身の教科書』（サンマーク出版）からの転載です。

国民学校修身教科書初等科四とありますから私も勉強したのでしょうが、残念ながら忘れてゐます。

産経新聞のコラム『産経抄』を長い間執筆していた、石井英夫さんの『日本人の忘れもの』に『たつた一人の修身研究』として紹介されていたので取り寄せた本です。

この方、インターネットで調べると、『あすか会教育研究所』代表という、教育熱心な方です。

表側のページにある、マッカーサーの命令で、日本中の貴重な書籍が焼き捨てられるという災難がありました。が、修身教科書もその一つだつたそう、編者の小池さんは日本中くまなく歩き、吉岐対馬で漸く見つけることが出来たのだそう、日本人の心と魂を磨く絶好の教えがつまっています。

一家に一冊、手許において親子で読み、身に付けたい教えがいっぱいです。